

Ⅱ. 研修別報告

1. 利用者ニーズを基盤とした入退院支援の
質向上に向けた看護職者への教育支援

利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援

キーワード：退院支援教育プログラム 人材育成 利用者ニーズ

1. 目的および背景

1. 目的

本事業の目的は、県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、県健康福祉部医療福祉連携推進課と協働で「入退院支援教育プログラム(2020年度)」を策定・施行し、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進し、人材育成の方策を追究することである。

2. 背景

わが国では急速な少子高齢化のなかで、団塊の世代が後期高齢者となる2025年に備え医療・介護のあり方、医療提供体制の改革が進められている。2014年度の診療報酬改定では、医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実に取り組み、医療提供体制の再構築や「地域包括ケアシステム」の構築を図ることが基本認識・重点課題として示され、在宅復帰率の導入等により在宅移行が推進されることとなった。また2016年度の診療報酬改定では、「退院支援加算」が新設され、病棟の退院支援業務等に専従する職員の配置や、多職種による早期のカンファレンス、退院直後の看護師等による訪問指導の実施による退院支援の充実等、「地域包括ケアシステム」の推進に向けた取り組みが示された。

また2018年度の診療報酬改定では、退院支援加算が入退院支援加算に変更され、入院予定者が入院生活や入院後の治療過程がイメージでき、安心して入院医療が受けられるための支援が求められるようになった。そのため医療者側が褥瘡・栄養・薬剤等のリスクや、入院前に受けていたサービス・退院困難要因等を入院前に把握し、入院前からの退院支援が推進されるようになった。2020年の診療報酬改定では、入退院支援の取り組みの推進として、関係職種と連携して入院前の支援を実施し、病棟職員との情報共有や患者またはその家族等への説明等を行う場合の評価が新設された。また高齢者の総合的な機能評価を行ったうえで、その結果を踏まえて支援を行う場合の総合評価加算が新設された。

医療提供体制が地域完結型へと移行される中で、保健医療福祉サービス利用者が医療機関を退院した後も住み慣れた場所で望む療養生活を続けるためには、利用者ニーズに対応できるよう入退院支援に必要な知識・技術を修得し、多職種と連携・協働しながら支援方法を構築していく能力をもつ看護職者の人材育成が重要となる。

本事業では、2012年度から県健康福祉部医療福祉連携推進課と大学が協働して、利用者ニーズを基盤とした退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進し、人材育成の方策を追究している。その方策として、2012年度には県内の全看護職者への教育支援として、看護職者が入院時から利用者ニーズに対応した退院支援が実践できるように、大学において講義・ワークショップを開催した。

2013年度から「退院支援教育プログラム(2013年度)」を策定し、看護職者の知識・意識の向上に焦点を置き、退院支援に関する知識を確実に修得できるよう、講義・ワークショップ内容の充実を図った。2014年度は「退院支援教育プログラム(2014年度)」を策定し、講義・ワークショップをベーシック研修と位置づけるとともに、ベーシック研修修了者を対象とした「フォローアップ研修(事例検討)」を加え、退院支援の取り組みのリフレクションを行い、新たな知見を得ることを目指した。そして、「退院支援教育プログラム(2015年度)」では、フォローアップ研修に1年間の取り組みの振り返りを加えた。フォローアップ研修において、多施設の看護職者ととともに1年間の入退院支援の取り組みを振り返ることで、自部署での取り組みの成果と課題がより具現化されていた。

2016年度の「退院支援教育プログラム(2016年度)」では、ベーシック研修、フォローアップ研修に加え、フォローアップ研修修了者を対象に、参加者自身の取り組んだ事例を提示して事例検討を行うアドバンス研修を加えた。ベーシック研修、フォローアップ研修では、研修参加者の知識・認識の向上につながり、利用者ニーズを基盤とした退院支援の取り組みにつながることを確認した。アドバンス研修参加者は3回継続して事例検討に参加する中で、利用者主体の入退院支援が考えられるようになり、検討内容の深化がみられた。

2018年度は、「退院支援教育プログラム(2018年度)」の施行にあたり、アドバンス研修修了者に、フォローアップ研修のグループ討議のファシリテートを依頼し、新たな知見を得る機会を提供した。各研修修了者への質問紙調査による学びの確認では、ベーシック研修から更に、フォローアップ研修、アドバンス研修へと研修を重ねることで、利用者ニーズを基盤とした入退院支援の具体的実践につながっていることが分かった。特にアドバンス研修修了者は、自施設の退院支援の強みや課題を客観的に捉え、退院支援体制構築に向けた具体的な取り組みについて考えることができることが確認できた。「入退院支援教育プログラム(2019年度)」は、フォローアップ研修、アドバンス研修に焦点化して施行した。

本年度の「入退院支援教育プログラム（2020年度）」は、アドバンス研修に、アドバンス研修修了者への教育支援として「エキスパートミーティング」を加えて施行した。エキスパートミーティングはアドバンス研修修了後の入退院支援の質向上に向けた取り組みの実際を共有し、地域包括ケアシステムの中での入退院支援の質向上に向けた今後の取り組み等の検討の機会とした。

なお、本来であれば、2020年度診療報酬改定にあたり、医療機関の看護職者を対象に入退院支援の知識の習得を促し、自施設の課題を明確にする「ベーシック研修」を施行する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けて、集合研修が困難となり、「ベーシック研修」は中止した。そして、アドバンス研修もエキスパートミーティングも Teams を活用したオンライン研修に変更した。

表1 入退院支援教育プログラム（2020年度）

【アドバンス研修】 [第1回目] 事例検討1 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション 事例検討2 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション [第2回目] 事例検討3 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション 事例検討4 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション 事例検討5 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション [第3回目] 事例検討6 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション 事例検討7 事例報告、事例を踏まえた意見交換・リフレクション
【エキスパートミーティング】 取り組み事例の報告1 取り組み事例の報告2 意見交換

II. 事業担当者

本事業は以下の担当で実施する。

地域基礎看護学領域：藤澤まこと、黒江ゆり子、杉野緑、加藤由香里、渡邊清美

機能看護学領域：田辺満子、橋本麻由里

岐阜県健康福祉部医療福祉連携推進課：若原明美

III. 実施方法

1. 県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、県健康福祉部医療整備課と協働で、大学において「入退院支援教育プログラム（2020年度）」を施行する。

1) アドバンス研修の施行

アドバンス研修の対象者は、フォローアップ研修修了者とする。参加者自身が退院支援に取り組んだ事例を提示して事例検討を行う。その際、各自1回事例検討のファシリテートを担当する。意見交換をとおして自部署の退院支援の充実に向け、自ら取り組むため知見を得る機会とする。参加者は研修ごとに事例検討により学び考えたこと、今後実践できるとよいと思ったことをリフレクションシートに記載する。また研修修了後に最終レポートを提出する。

2) エキスパートミーティングの施行

エキスパートミーティングの対象者は、アドバンス研修修了者とする。アドバンス研修修了後の入退院支援の質向上に向けた取り組みの実際を共有し、今後の地域包括ケアシステムの中での入退院支援の質向上に向けた取り組み等の検討の機会とする。

3) 修了証の交付

各研修における学びの内容を確認し、修了証を交付する。

2. 研修参加者に学び、学びを踏まえた入退院支援のあり方について考え、「入退院支援教育プログラム（2020年度）」についての意見に関する質問紙調査を実施する。

1) 対象：アドバンス研修参加者

2) 質問紙調査内容：

①対象者の背景（年齢、看護師としての経験年数）

②本研修の退院支援事例の事例検討を通して学んだことは何ですか。

③事例検討のファシリテートで大切なことや取り入れたいことは何ですか。

④自部署の退院支援の充実に向け取り組みたいこと、又は取り組み始めたことは何ですか。

3) 分析方法:質問紙への記載内容を、意味内容ごとの文脈に分けて要約し、質的に分類する。

3. 質問紙調査結果を踏まえて事業担当者間で検討し、県内全体の入退院支援の質向上に向けた看護職者への「入退院支援教育プログラム(2020年度)」を改善する。

4. 倫理的配慮:研修参加者には、アドバンス研修の質問紙調査の結果及び討議の内容を報告書や関連学会等で公表する旨、文書を用いて口頭で説明し、文書による同意を得た。また岐阜県立看護大学研究倫理委員会の承認を得た(承認番号0231)。

IV. 結果

1. 8年間の「入退院支援教育プログラム」修了者数

県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、2013年度から8年間実施してきた「入退院支援教育プログラム」の修了者の総数は、ベーシック研修633名、フォローアップ研修294名、アドバンス研修67名、エキスパートミーティング7名となった。

表2 8年間の入退院支援教育プログラム修了者数

修了者数(人)	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	計
ベーシック研修	84	145	115	122	97	70			633
フォローアップ研修		27	68	52	61	40	46		294
アドバンス研修				15	10	17	14	11	67
エキスパートミーティング								7	7
計	84	172	183	189	168	127	60	18	1001

2. 退院支援に関する「入退院支援教育プログラム(2020年度)」の施行

県内の入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育的支援として、看護職者の知識・意識の向上に焦点を置き、退院支援に関する知識を確実に修得できるよう、「入退院支援教育プログラム(2020年度)」を企画・開催した。「入退院支援教育プログラム(2020年度)」でのアドバンス研修、エキスパートミーティングの施行内容、及びアドバンス研修修了後の質問紙調査結果を以下に報告する。

1) 退院支援教育プログラム(2020年度)アドバンス研修の施行

(1) アドバンス研修の施行

- ①開催日時:2020年10月21日(水)14:00~16:00(第1回)
2020年11月26日(木)14:00~16:00(第2回)
2020年12月22日(火)14:00~16:00(第3回)
- ②開催方法:Microsoft Teamsを用いてオンラインで行った。
- ③参加者:昨年度までのフォローアップ研修修了者の看護職者を対象として、看護部長に当該施設の看護職者のアドバンス研修への参加を依頼し、11人の参加を得た。
- ④参加施設:県内全医療機関98施設に参加を依頼し、11施設よりの参加を得た。
- ⑤修了証交付人数:岐阜県立看護大学の看護実践研究指導事業に係る修了証を11人に交付した(表2)。

(2) アドバンス研修の概要

本研修は、フォローアップ研修修了者が、自部署の退院支援の充実に向けて中核となり取り組めることを目指している。参加者はアドバンス研修前に郵送された「事例シート」に自身が取り組んだ事例をまとめ、アドバンス研修で学びたいことを明確にした上で参加した。事例検討では参加者は5,6名ずつの2グループに分かれ、事例ごとに交代でファシリテーターの役割を担った。また、研修ごとにリフレクションシートに学んだことや考えたことを記載し、3回の研修会終了後に最終レポートとして、提示事例に対する退院支援計画を考案し提出した。以下、アドバンス研修の概要を表3に示す。

表3 アドバンス研修の概要

【アドバンス研修】

1. オリエンテーション(2回目からは前回のポイント内容の確認)
2. 自己紹介・役割決定
3. 事例報告・事例検討
5. 支援ポイントの確認

アドバイザー：・岐阜清流病院 地域医療連携センター退院調整看護師

・訪問看護ステーションかがやき 管理者

・岐阜保健大学 講師

6. リフレクションシート記入

2) 退院支援教育プログラム(2020年度)エキスパートミーティングの施行

(1) エキスパートミーティングの施行

- ①開催日時：2020年11月25日(水)16:00～17:30
- ②開催方法：Microsoft Teamsを用いてオンラインで行った。
- ③参加者：昨年度までのアドバンス研修修了者の看護職者を対象として、当該者へ参加を依頼し、7人の参加を得た。
- ④参加施設：県内20施設56人に参加を依頼し、5施設7人の申込みを得た。なお、取り組み事例報告施設2施設のうち1施設3人は、アドバンス研修修了者であり、修了証対象者とした。
- ⑤修了証交付人数：岐阜県立看護大学の看護実践研究指導事業に係る修了証を7人に交付した。

(2) エキスパートミーティングの概要

岐阜県における利用者ニーズを基盤とした今後の入退院支援のあり方を考え、新たな知見を見出すことを目指し、県内の2施設の「入退院支援教育プログラム」修了者等に、自施設における入退院支援の取り組み事例の報告を得た。その後参加者と、自施設での入退院支援の質向上に向けた課題・課題解決の方策等についての自由な意見交換を行った。

表4 エキスパートミーティングの概要

【エキスパートミーティング】

1. オリエンテーション
2. 取り組み事例報告1「患者・家族を生活者と捉えて支援する入退院支援の質向上に向けた取り組み」
報告者：JA岐阜厚生連 岐阜・西濃医療センター 揖斐厚生病院 アドバンス研修修了者
3. 取り組み事例報告2「地域における退院支援」
報告者：JA岐阜厚生連飛騨医療センター 久美愛厚生病院 医療介護センター 退院調整看護師
4. 参加者間の意見交換：自施設での入退院支援の質向上に向けた課題・取り組みの共有
5. 意見・感想の記入

(3) エキスパートミーティング参加者の意見・感想

エキスパートミーティング参加者には、修了後に参加に関する意見・感想として、参加を決めた理由、参加しての学び、今後に活かしたいことや今後の企画への要望、またオンラインでの実施等に関する意見を確認し、7名より意見があった。

エキスパートミーティングへの参加理由は、「他施設の退院支援の取り組みを知る機会であり自己研鑽になる」「上司に参加をすすめられた」「自施設の取り組みを他施設に知ってもらいたい」などであった。参加後の学びについては、「病院全体での退院支援看護師の教育システムの必要性がある」など組織的な教育体制整備や、「他施設の入退院支援の取り組みや課題を共有できた」「地域全体での取り組みが素晴らしい」などがあり、他施設・地域連携の課題・取り組みについて、また「入院時に入院前の生活や患者・家族の思いなどの情報共有する大切さを思った」など、入院時から退院を見据えた情報収集・情報共有についてなどの学びがあった。

今後活かしたいこととしては、「退院支援強化の院内教育プログラムを考えたい」など退院支援に関する教育・研修、「病棟内や連携室、地域と情報共有し継続看護につなげたい」、「意思決定支援の大切さを病棟に働きかけたい」などの意見があった。

今後の企画への要望では「他施設の取り組みを知る」「最新の情報を学習する機会があるとよい」「退院支援看護師の育成状況」や「とても勉強になり刺激になったので、みんなに参加してほしい」などの意見があった。

また、オンラインでの研修企画については、「慣れないことで戸惑った」という意見や「対面の方が

話しやすい」という意見もあったが、「アットホームな時間だった」「大変有意義な時間が過ごせた」などの意見があった。内容については、「意見交換にもう少し時間があるとよかった」「資料が事前にあるとよかった」などの意見があった。

3. 質問紙調査による退院支援教育プログラム参加者の学びの明確化

研修修了後に質問紙を配付し、自由意思に基づく質問紙の回答・返送を依頼した。質問紙の対象者の概要は単純集計を行い、自由記載内容は意味内容ごとに分けて要約し、意味内容が同じものを集めて帰納的に分類した。

なお以下【 】は分類を、《 》は小分類を示す。

1) アドバンス研修参加者を対象とした質問紙調査

(1) アドバンス研修質問紙調査回答者の概要

アドバンス研修の参加者 11 名を対象とした質問紙調査には、10 人からの回答があった（回答率 91.0%）。経験年数としては、5 年以上 10 年未満は 2 人（20.0%）、10 年以上 15 年未満は 3 人（30.0%）、15 年以上 20 年未満は 2 人（20.0%）、20 年以上 30 年未満は 3 人（30.0%）であった。

(2) アドバンス研修の事例検討を通して学んだこと

アドバンス研修の事例検討を通して学んだことは、10 人からの回答があり、記述内容は 32 件あった。記載内容は【看護職及び多職種で情報共有し協働して支援する】、【患者・家族の思いや価値観に関心を向ける】、【患者・家族、多職種で話し合い患者の意思決定を確認する】、【様々な視点で支援を行う】、【看護師が退院先を決めつけず選択肢を広げて考える】、【早期からアセスメントし問題を抽出する】、【コロナ禍における難しさと工夫】、【患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ】、【入退院支援は看護師のやりがいにつながる】、【スタッフに退院支援を学んでもらう大変さ】の 10 分類に分類された。

【看護職及び多職種で情報共有し協働して支援する】の小分類は、《看護職及び多職種で情報収集・情報共有を重ね支援する》《患者・家族の思いに寄り添い多職種で協働して支援する》《定期的に多職種で情報共有し方向性を統一して本人・家族に示していく》《病院と地域を交えて直接引き継ぐ》であった。【患者・家族の思いや価値観に関心を向ける】の小分類は、《患者・家族の思いに関心を向け関わる》《患者・家族の希望・意見を把握する》《患者の思いに寄り添う》《患者や家族の価値観を尊重する》《生活で大切にしてきたことや不安などの情報を得て全体像を捉える》であった。

【患者・家族、多職種で話し合い患者の意思決定を確認する】の小分類は、《認知症などで意思疎通な患者でも多職種でその患者の意思を家族も含めた全員で話し合い確認していく》《意志決定支援》《重要な決定は患者・家族・医師がそろって話し合うことが大切》であった。

【様々な視点で支援を行う】の小分類は、《自己効力感を高める声かけや思いを傾聴し障害受容を支援する》《現状の ADL を把握し次の病床での援助に繋げる》《家族を含めた環境（社会資源・家族のレスパイトケア・金銭面など）を整える》《退院後の生活のイメージをもつ》《様々な視点で退院支援を行う》であった。

【看護師が退院先を決めつけず選択肢を広げて考える】の小分類は、《看護師が退院先を決めつけない》《在宅か転院の 2 択ではなく地域の様々な施設にも選択肢を広げて考える必要であると再認識した》であった。

【早期からアセスメントし問題を抽出する】の小分類は《早期からアセスメントし問題を抽出する》、【コロナ禍における難しさと工夫】の小分類は《コロナ禍における難しさと工夫》、【患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ】の小分類は《患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ》、【入退院支援は看護師のやりがいにつながる】の小分類は《入退院支援は看護師のやりがいにつながる》、【スタッフに退院支援を学んでもらう大変さ】の小分類は、《スタッフに退院支援を学んでもらう大変さ》であった（表 5-1）。

表 5-1 アドバンス研修の事例検討を通して学んだこと (n=10)

分類	小分類	要約
看護職及び多職種で情報共有し協働して支援する (8 件)	看護職及び多職種で情報収集・情報共有を重ね支援する	患者・家族を取り巻く他職種で情報共有し、カンファレンスを重ねながらサポートしていく
		全職種が連携・協力し合いながら情報共有することでよりそったケアにつながる
		患者・家族からの情報収集や介入は、看護師のみで行うのではなく多職種で関わり共有していく
	多職種で協働することの重要性	
患者・家族の思いに寄り添い多職種で協働して支援する	患者・家族の希望・意見を看護師が把握し、多職種で協働して最も良い方向へ支援・調整を行う	患者の思いに寄り添いそれに向け多職種で協働し話し合いサポートすることが大切

	定期的に多職種で情報共有し方向性を統一して本人・家族に示していく	定期的な多職種カンファレンスを開催して、方向性の統一、情報を共有して、それを本人・家族に示していく
	病院と地域を交えて直接引き継ぐ	病院と地域を交えてカンファレンスを開き直接引き継ぎを行う
患者・家族の思いや価値観に関心を向ける(6件)	患者・家族の思いに関心を向け関わる	患者・家族の思いを大切にしないといけない 普段の関わりから患者・家族の思いを知るよう関心を向け関わる
	患者・家族の希望・意見を把握する	患者・家族の希望・意見を看護師が把握する
	患者の思いに寄り添う	患者の思いに寄り添う
	患者や家族の価値観を尊重する	患者や家族の価値観を尊重する
	生活で大切にしてきたことや不安などの情報を得て全体像を捉える	生活上で大切にしてきたことや不安などの情報を得て全体像を捉える
	患者・家族、多職種で話し合い患者の意思決定を確認する(5件)	認知症などで意思疎通な患者でも多職種でその患者の意思を家族も含めた全員で話し合い確認していく
	意志決定支援	意志決定支援 家族のみでなく本人の意思決定支援もしっかり行う
	重要な決定は患者・家族・医師がそろって話し合うことが大切	大きな決定をするときは、患者・家族(キーパーソン)・医師がそろって話し合うことが大切
様々な視点で支援を行う(5件)	自己効力感を高める声かけや思いを傾聴し障害受容を支援する	自己効力感を高める声かけや思いを傾聴し障害受容を支援する
	現状のADLを把握し次の病床での援助に繋げる	現状のADLを把握し強化する部分を次の病床での援助に繋げる
	家族を含めた環境(社会資源・家族のレスパイトケア・金銭面など)を整える	家族を含めた環境(社会資源・家族のレスパイトケア・金銭面など)を整え、患者と家族が在宅介護を継続して行えるように生活を整える必要性を学んだ
	退院後の生活のイメージをもつ	退院後の生活のイメージをもつ
	様々な視点で退院支援を行う	様々な視点で退院支援を行う
看護師が退院先を決めつけず選択肢を広げて考える(3件)	看護師が退院先を決めつけない	看護師の思いで決めつけてはいけない 看護師が在宅ではなく施設入所しかないと決めつけない
	在宅か転院の2択ではなく地域の様々な施設にも選択肢を広げて考える必要であると再認識した	在宅か転院・転棟の2択ではなく、対象を地域に帰すことも選択肢の一つとして考えていくことが必要であると再認識した
早期からアセスメントし問題を抽出する(1件)	早期から情報収集・アセスメントし問題を抽出する	早期から十分な情報収集・アセスメントし問題を抽出する
コロナ禍における難しさと工夫(1件)	コロナ禍における患者家族との関りの難しさと工夫	コロナ禍における、患者家族との関りの難しさと各施設で工夫していること
患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ(1件)	患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ	患者・家族へのねぎらいの声かけの大切さ
入退院支援は看護師のやりがいにつながる(1件)	入退院支援は看護師のやりがいにつながる	入退院支援を行うことで看護師としてのやりがいにつながる
スタッフに退院支援を学んでもらう大変さ(1件)	スタッフに退院支援を学んでもらう大変さ	スタッフへ退院支援を教える、学んでもらう大変さ

(3) アドバンス研修での事例検討のファシリテートで大切なことや取り入れたいこと

アドバンス研修の学びを踏まえて、参加者が考える事例検討のファシリテートで大切なことや取り入れたいことについては、10人からの回答があり、記述内容は31件あった。

記載内容は【参加者全員が平等に意見が言えるよう雰囲気づくりをし対話を促す】、【参加者一人ひとりの意見を中立の立場で尊重し否定しない】、【参加者の意見を引き出すため話題を提案するなど工夫をし共感的態度で進行し時間内に終了する】、【事例検討の目的・目標に沿った検討を促し、ポイントを整理しながらまとめ、全員が納得し理解できる結論を導く】、【事例提供者の取り組みを前向きに

評価し自信につなげる】、【事例検討会のあり様を工夫し効果的に進めるよう努力したい】、【入退院支援は患者・家族に寄り添えるよう考えることが大切で、そのために事例検討が有効】、【入退院支援は患者中心に他職種と意見交換しながら連携し支援することが大切】の8つに分類された。

【参加者全員が平等に意見が言えるよう雰囲気づくりをし対話を促す】では、「意見が出やすい雰囲気づくりをする」《発言者の意見をもとに参加者に対話を促し活発な意見交換ができるようサポートする》などがあり、【参加者一人ひとりの意見を中立の立場で尊重し否定しない】では、「参加者一人ひとりの意見を中立の立場で尊重し否定しない」があった。【参加者の意見を引き出すため話題を提案するなど工夫をし共感的態度で進行し時間内に終了する】では、「参加者の意見を引き出すために途中で話題を提案するなど考え進行する」《発信者の意見に共感を示し自分の意見を述べる》があり、【事例検討の目的・目標に沿った検討を促し、ポイントを整理しながらまとめ、全員が納得し理解できる結論を導く】では、「事例検討の目的を明確にして、目的に沿った検討ができるよう促す」《検討目的が達成できるよう全体像を把握し検討ポイントを整理しながらまとめる》などがあり、【事例提供者の取り組みを前向きに評価し自信につなげる】では、「事例提供者の取り組みを前向きに評価する」《事例提供者の取り組みを評価することで自信につなげる》があった。【事例検討会のあり様を工夫し効果的に進めるよう努力したい】では、「事例検討時は事例検討シートを活用したい」《事例検討時は助言者となる第三者がいると効果的に意見交換できる》などがあり、【入退院支援は患者・家族に寄り添えるよう考えることが大切で、そのために事例検討が有効】では、「入退院支援時、患者・家族に寄り添えるよう考えることが大切」《看護職者に前向きに入退院支援について考えてもらうには、事例検討が大切》があり、【入退院支援は患者中心に他職種と意見交換しながら連携し支援することが大切】では、「入退院支援時は患者中心に、生きがいを持って、安全安心に生活できるよう、他職種と意見交換しながら連携し支援することが大切」があった（表5-2）。

表 5-2 事例検討のファシリテートで大切なことや取り入れたいこと (n=10)

大分類	小分類	要約
参加者全員が平等に意見が言えるよう雰囲気づくりをし対話を促す(8)	意見が出やすい雰囲気づくりをする(3)	意見が出しやすいような雰囲気づくりをする
		意見を出しやすい雰囲気・場を作る
		意見が出なければ自身がまず発言し続いて発言しやすいようにする
参加者一人ひとりの意見を中立の立場で尊重し否定しない(3)	発言者の意見をもとに参加者に対話を促し活発な意見交換ができるようサポートする(3)	発言者の意見をもとに参加者にも対話を促進することで活発な意見交換ができるようサポートする
		意見を引き出せるようファシリテートしたい
		必要な時に必要な言葉かけを行う
参加者一人ひとりの意見を中立の立場で尊重し否定しない(3)	参加者全員が平等に意見が言えるようにする(2)	全員が必ず平等に意見が言えるようにする
		参加者全体に意見を言い合えるように、時には順番作るなど手を上げにくい人にも話せる環境を取り入れていきたいと思います。
		参加者1人1人の意見や思いが引き出せるよう中立の立場で意見を否定せず尊重する
参加者の意見を引き出すため話題を提案するなど工夫をし共感的態度で進行し時間内に終了する(4)	参加者の意見を引き出すために途中で話題を提案するなど考え進行する(2)	参加者から意見を引き出すために途中どのような話題を提案したらよいのか考えたこと
		それぞれの意見や疑問などを出していくこと
		発信者の意見に共感を示し、自分の経験を踏まえ自分の意見を明確に述べる
事例検討の目的・目標に沿った検討を促し、ポイントを整理しながらまとめ、全員が納得し理解できる結論を導く(7)	時間通りに終了する(1)	事例検討会を時間通りに終了すること
		事例検討の目的を明確にして、目的に沿った検討ができるよう促す
		意見が煮つまつたり、脱線したりした際に検討すべき点に修正できるようにしたい
事例検討の目的・目標に沿った検討を促し、ポイントを整理しながらまとめ、全員が納得し理解できる結論を導く(7)	事例検討の目的を明確にして、目的に沿った検討ができるよう促す(2)	事例提供者の目的が達成できるよう話をまとめ調整する
		常に全体像を把握し事例検討のポイントを整理する
		意見を整理しながらまとめる

	適時目的・目標を周知・確認しながら時間内に意見を整理し、参加者全員が納得し理解できるよう結論を導く(2)	結論が導き出せるよう適時目的・目標を周知・確認しながら時間内に意見を整理する
		参加者全員が納得し理解できるよう結論を出す
事例提供者の取り組みを前向きに評価し自信につなげる(2)	事例提供者の取り組みを前向きに評価する(1)	事例提供者の取り組みを否定することなく新たに良いと思う方法を提案する
	事例提供者の取り組みを評価することで自信につなげる(1)	事例提供者の取り組みの良い点を評価することが自信につながる
事例検討会のあり様を工夫し効果的に進めるよう努力したい(4)	事例検討時は事例検討シートを活用したい(1)	事例検討時は事例検討シートを活用したい
	事例検討時は助言者となる第三者がいると効果的に意見交換できる(1)	ファシリテートの時は進行が気になるので、助言者となる第三者がいる方が多様な観点で意見をかわせる
	院内で事例検討を行うときは、進行だけでなく、意見を分かりやすくまとめ、総括を行えるようにしていきたい(1)	院内で事例検討を行うときは、司会だけでなく、意見を分かりやすくまとめたり、総括を行えるようにしていきたい
	自身がファシリテートする時、時間や進行が気になり、発言者の意見が頭に入ってこなくて困った(1)	自身がファシリテートの時は時間や進行が気になって、発表者の意見がなかなか頭に入ってこなくて困った
入退院支援は患者・家族に寄り添えるよう考えることが大切で、そのために事例検討が有効(2)	入退院支援時、患者・家族に寄り添えるよう考えることが大切(1)	入退院支援時、患者・家族に寄り添う為にどうすればよいのか考えることが大切
	看護職者に前向きに入退院支援について考えてもらうには、事例検討が大切(1)	看護職者に前向きに入退院支援について考えてもらうには、事例検討が大切
入退院支援は患者中心に他職種と意見交換しながら連携し支援することが大切(1)	入退院支援時は患者中心に、生きがいを持って、安全安心に生活できるよう、他職種と意見交換しながら連携し支援することが大切(1)	退院支援において、患者の意思を中心に考え、生きがいを持って、安全安心に生活できるよう、他職種と意見を出し合い支援することが大切だと改めて感じた

(4) アドバンス研修後に自部署での退院支援の充実にに向けた取り組み

アドバンス研修において利用者ニーズを基盤とした退院支援のあり方を踏まえた、自部署での退院支援の充実に向け取り組みたいこと、又は取り組み始めたことでは、10人からの回答があり、記述内容は26件あった。記述内容は、【患者・家族の思いを聴く機会を作り、想いに寄り添った退院支援の実践をする】、【患者・家族の意思決定支援をする】、【多職種を交えたカンファレンスを適宜開催し、内容も充実させる】、【外来と病棟の連携体制を充実させ、院外との連携も強化する】、【退院後訪問により退院後の生活状況をスタッフ間で共有し実践への意欲向上に繋げる】、【研修会や勉強会を実施する】、【退院支援や退院調整への関心が高められるよう、スタッフへの教育・指導を行う】、【事例検討会を開催する】、【役割モデルとなることを意識して看護実践を行う】、【スタッフ間での協力体制作りを支援する】、【退院支援の意識向上に向けた取り組みの実践をしている】、【退院支援の充実に図る】の12分類に分類された。

【患者・家族の思いを聴く機会を作り、想いに寄り添った退院支援の実践をする】では、《入院早期から退院支援に取り組み、患者・家族と寄り添い安心して退院できるよう支援する》《業務改善をすすめる、患者・家族に寄り添える時間を確保する》があり、【患者・家族の意思決定支援をする】では、《患者・家族の意思決定を支援する》があった。【多職種を交えたカンファレンスを適宜開催し、内容も充実させる】では、《多職種が参加するカンファレンスを開催し、情報交換や協議をする》《カンファレンスを充実させる》があり、【外来と病棟の連携体制を充実させ、院外との連携も強化する】では、《病棟と外来の補完体制を整える》《外来と病棟の積極的な情報交換を進める》などがあった。【退院後訪問により退院後の生活状況をスタッフ間で共有し実践への意欲向上に繋げる】では、《退院後訪問の様子をフィードバックすることで看護実践に活かす》《退院後訪問や外来訪問を実施する》などがあり、【研修会や勉強会を実施する】では、《他病棟の管理職者とともに指導や勉強会を積極的に実施する》《退院調整の実践事例についての勉強会を行う》などがあり、【退院支援や退院調整への関心が高めら

れるよう、スタッフへの教育・指導を行う】では、《退院支援や退院調整に関心を高められるよう自身の経験を活かしたスタッフ教育をする》《生活をみる視点を共通認識できるよう支援する》などがあった。【事例検討会を開催する】では、《事例検討会を開催する》《実践事例の振り返りが必要である》があり、【役割モデルとなることを意識して看護実践を行う】では、《役割モデルとなることを意識し実践をする》があり、【スタッフ間での協力体制作りを支援する】では、《スタッフ間での協力体制をつくるよう支援する》であった。【退院支援の意識向上に向けた取組みの実践をしている】では、《退院支援の意識向上に向けて院内メールを活用して情報発信している》があり、【退院支援の充実を図る】では、《退院支援の充実を図る》があった（表 5-3）。

表 5-3 自部署の退院支援の充実に向け今後取り組みたいこと（n=10）

分類	小分類	要約
患者・家族の思いを聴く機会を作り、想いに寄り添った退院支援の実践をする（4）	入院早期から退院支援に取り組み、患者・家族と寄り添い安心して退院できるよう支援をする	今後は病棟管理者として、退院指導や退院支援に直接関わることになるので、患者・家族の思いに寄り添い、安心して退院できるよう支援する 退院支援は入院時早期から取り組み、スクリーニング・支援計画書作成を実施し、病状から看護問題を考え、家族・患者と関わり寄り添うことが必要である
	業務改善をすすめ、患者・家族に寄り添える時間を確保する	コーディネーターが中心となりプライマリーナースが患者・家族の思いを聴く時間をつくれるよう業務調整をする 多くの間接業務に追われるなかでも、患者家族に寄り添える時間が確保できるよう業務改善を行う
	患者・家族の意思決定支援をする	患者・家族の意思決定支援を行う
多職種を交えたカンファレンスを適宜開催し、内容も充実させる（3）	多職種が参加するカンファレンスを開催し、情報交換や協議する	医師、PT、ST、栄養士など多職種が参加するカンファレンスを開催し、目標の共有や問題点、解決方法などを検討する カルテに記載されていない情報や、記録からは読み取れないことがあるため、適時にケースカンファレンスを行い、情報共有を実施する
	カンファレンスの充実をさせる	カンファレンスを充実させる
外来と病棟との連携体制を充実させ、院外との連携も強化する（3）	病棟と外来の補完体制を整える	病棟と外来の補完体制を整える
	外来と病棟の積極的な情報交換を進める	病棟看護師として、退院支援後の担当患者の状況を把握することも重要だと思うため、外来へ出向き外来看護師から直接状況を聞く 地域包括ケア病床から急性期病床へ応援に行く機会があるため、転床後の患者の経過をフィードバックする
	院内外での連携を強化する	院内・院外での連携を強化する
退院後訪問により退院後の生活状況をスタッフ間で共有し実践への意欲向上に繋げる（4）	退院後訪問の様子をフィードバックすることで看護実践に活かす	退院後の様子を写真などの生活情報からを受け持ち看護師や他のスタッフで共有し、退院支援に向けて取り組む意欲向上に努める 退院後訪問に行くことでフィードバックして学び、次の看護実践に生かす
	退院後訪問や外来訪問を実施する	退院後訪問（外来訪問）を実施する
	退院後訪問の実施をする	退院後訪問を実施する
研修会や学習会を実施する（3）	他病棟の管理職者とともに指導や勉強会を積極的に行う	退院支援に関しての部下スタッフへの指導や勉強会を積極的に行えるように、師長や他の主任も巻き込んでいく
	家族との十分な関わりが持てることを目指した研修会を実施する	家族と自信を持って話せるように知識の向上のため研修会を実施していく
	退院調整の実践事例についての勉強会を行う	実際に関わった事例検討を自部署の勉強会での開催する
退院支援や退院調整への関心が高められるよう、スタッフへの教育・指導を行う（3）	退院支援や退院調整に関心を高められるよう自身の経験を活かしたスタッフの教育をする	自分が経験してきたことを今後活かしていくことや、退院支援や退院調整に関心をもってもらえるようスタッフを育てる

	PNS で看護師と退院支援状況を確認し、アドバイス・助言を行う	PNS でパートナーとなった看護師と共にプライマリーの退院支援状況を確認し、必要なアドバイスや助言を行う
	生活をみる視点を共通認識できるように支援をする	生活をみる視点を共通認識できるようファシリテートを行う
事例検討会を開催する(2)	事例検討会の開催する	事例検討会の開催をする
	実践事例の振り返りが必要である	1つ1つのケースを振りかえることが、今後必要である
役割モデルとなることを意識して看護実践を行う(1)	役割モデルとなることを意識し実践をする	自分自身が役割モデルになれるよう実践をする
スタッフ間での協力体制作りの支援をする(1)	スタッフ間で協力体制をつくるよう支援する	業務調整やスタッフ間での協力体制がつかれるよう働きかけていく
退院支援の意識向上に向けた取組みの実践をしている(1)	退院支援の意識向上に向けて院内メールを活用して情報発信している	退院支援の意識向上に向けて、院内メールも活用して情報発信している
退院支援の充実を図る(1)	退院支援の充実を図る	退院支援の充実を図っていく

4. 入退院支援の質向上に向けた「入退院支援教育プログラム（2020年度）」の改善

本年度の「退院支援教育プログラム（2020年度）」では、オンラインを利用して、アドバンス研修、エキスパートミーティングを施行した。アドバンス研修の学びより、利用者ニーズを基盤とした支援方法が検討されたことや、ファシリテーターとしての役割が学べたことが確認できた。エキスパートミーティングでは、研修修了者の医療機関内での退院支援充実に向けた取り組みや、地域との連携を視野に入れた継続支援の取り組みが報告され、新たな知見が得られたことが確認できた。

研修方法としては、初めてのオンライン開催となった。参加者個々のインターネット環境等が様々であるため、事前の接続確認等は必要であったが、研修が開始されると積極的に意見交換が行われていた。エキスパートミーティング参加者からは、オンラインでの開催について「アットホームな時間で大変有意義な時間が過ごせた」との意見もあった。次年度も本年度を踏襲した「退院支援教育プログラム（2021年度）」を開催し、入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進する。研修方法は状況に応じて検討することとする。

V. 教員の自己点検評価

1. 看護実践の場にと与えた影響

1) 県内における研修修了者数

本事業では入院前から利用者ニーズに対応した退院支援が実践できるように、看護職者の知識・意識の向上、および中核となって自部署の入退院支援の課題解決に取り組める人材育成に焦点をおき、「入退院支援教育プログラム」を施行している。本年度はアドバンス研修に加えて、アドバンス研修修了者を対象としたエキスパートミーティングを含む「退院支援教育プログラム（2020年度）」を施行した。本年度のアドバンス研修修了者は11名で、エキスパートミーティング参加者は7名であった。これまでの8年間の研修修了者の総数として、ベーシック研修修了者は633名、フォローアップ研修修了者は294名、アドバンス研修修了者は67名、エキスパートミーティング参加者は7名となり、総修了者数は1001名となった。エキスパートミーティングでの取り組み事例からも、本事業の修了者が中核となり医療機関の入退院支援の質向上に寄与していることが明確となった。

2) 入退院支援教育プログラム研修の成果

(1) アドバンス研修における成果

アドバンス研修修了者への質問紙調査結果より、事例検討を通して学んだこととして、患者・家族の思い・価値を尊重し、多職種で協働して患者の意思決定を確認し支援すること、退院先は看護師が決めるのではなく、選択肢を広げて考える必要があること等が学びとして示されていた。

また事例検討のファシリテートで大切なこととして、参加者の意見を引き出し、事例検討の目的に沿った検討ができるよう検討ポイントを整理しながらまとめることや、事例提供者の取り組みを前向きに評価し、自信につなげることが重要と捉えられていた。そして患者・家族に寄り添うためには事例検討が有効であることや、患者を中心に多職種と意見交換しながら支援する大切さを再認識したことが示されていた。そして事例検討を取り入れる際、事例検討シートを活用する等の工夫や、ファシリテートの際には、司会だけでなく、意見をわかりやすくまとめることや、総括を行う必要があることも認識されていた。

今後の自部署の退院支援の充実にに向けた取り組みとして、患者・家族の思いに寄り添った退院支援の実践や、多職種カンファレンスの開催、病棟・外来・院外との連携の強化が示され、具体的に退院後訪問の実施や研修会・学習会の実施等が示され、自身が役割モデルになれるよう意識して実践することも示されていた。

(2) エキスパートミーティング開催による成果

エキスパートミーティングでは、「入退院支援教育プログラム」研修修了者の取り組み事例が報告されたことで、医療機関内で退院支援充実にに向けた取り組みの実際や、院内での退院支援ナースの教育の実際や地域との継続支援の実際が学んでいた。当該研修修了者が中核となって入退院の取り組みを推進することで、スタッフ教育や入退院支援の組織的取り組みにつながる事が明らかになった。今後に生かしたいこととして、退院支援強化のための院内教育プログラムの考案や、意思決定支援の充実に、病棟・地域連携室・地域との継続看護等の具体的な取り組みが示された。

今後の企画への要望として、多施設の取り組み状況の共有、入退院支援に関するスタッフ教育についての情報共有、最新の情報の学修等が示されており、参加者にとって意見交換の機会の提供と今後の入退院支援の質向上に向け、新たな知見が得られる機会を提供する機会として、今後も継続して教育支援していく必要があると考える。

2. 本学の教育・研究に与えた影響

教育への影響では、大学院看護学研究科博士前期課程の「地域基礎看護学演習Ⅱ」、「クロニックケア政策論」の授業の際に、本看護研究実践指導事業の報告書を提示し、県内全体の入退院支援の質向上を目指した教育支援の現状を説明したうえで、入退院支援の現状と課題、革新の方策について学生と討議した。また研修参加者の所属施設には本学の実習施設も多数含まれており、研修修了者が自施設で利用者ニーズを基盤とした入退院支援に取り組むことにより、学生は患者・家族の意思を尊重した入退院支援の重要性を学ぶことができる。

VI. 今後の課題、発展の方向性

アドバンス研修修了者は、自身の退院支援の充実に向け取り組むとともに、自施設の入退院支援の課題を客観的に捉え、スタッフが患者を生活者と捉えるための方策や、院内・地域の多職種との協働も含めた入退院支援体制構築に向けた具体的な取り組みについて考えることができおり、今後も自部署の入退院支援の充実に向けて中核となって取り組むことが期待できると考える。

エキスパートミーティングは、アドバンス研修修了者の自部署での入退院支援の質向上に向けた取り組みを共有し、新たな知見を得る機会となっていた。今後も県全体の入退院支援の質向上に向けて検討する貴重な機会として、参加者を増やしていきたいと考える。

次年度も状況によっては本年度を踏襲し、アドバンス研修、エキスパートミーティングを含む「入退院支援教育プログラム（2021年度）」を対面研修あるいはオンライン研修として開催し、入退院支援の質向上に向けた看護職者への教育支援を推進する。

本事業での看護職者への教育支援が、県内全体の入退院支援の質向上に向けた看護職者の人材育成として貢献できるよう、県健康福祉部医療福祉連携推進課と協働で、本事業の取り組みを推進していきたいと考える。